

90 代男性

●主訴

右足ふくらはぎから下の痛み

3 年程前からふくらはぎや脛に痛みがあり、最近是我慢できないくらいに痛むときがある。主に歩行中に痛みが強くなり、少し休むと痛みは軽減していたが、近頃は休息しても痛みが治まらない。夜間就寝中に脛の痛みで目覚めるときもある。

既往歴；約 20 年前 前立腺癌

約 10 年前 十二指腸癌

●症状所見

某クリニックより紹介状あり、前立腺癌術後両下肢リンパ浮腫と疼痛との診断で来院。

前年には大学病院で右下腿の深部静脈血栓症の評価もしたが、明らかな深部静脈血栓はなく、リンパ浮腫による疼痛との診断で経過観察となっていた。しかし、数ヶ月前から痛みが酷くなり歩行も困難になってきたとのことで来院された。

初診時、両下肢に浮腫が認められたが、左は疼痛を伴わないことから、まずは右の浮腫軽減と疼痛緩和を図ることとした。

●治療の内容と経過

1 診；施術前に両下肢の計測を行ったところ、各部位でのサイズ差(最大 16mm,右>左)があり、右足関節周囲はやや硬化が見られた。

まずは刺さない鍼(陰陽太極鍼)の手法で全身の巡りを整え、徒手リンパドレナージ(以下 MLD)にて浮腫の軽減を図ることとした。

主に足部のツボに接触鍼(皮膚上に鍼を貼り付ける方法)と施灸し、右下肢と体幹部は MLD を行った。施術後は各部位とも 8mm 程度のサイズダウンがあり、疼痛はやや軽減した様子だった。

2 診；1 週間後に来院。

初回治療後、駅まで歩いている間に下肢の痛みが再燃したとのこと。浮腫の様子も戻っていたことから継続的な圧迫療法が必要と考え、弾性ソックスをご購入頂き夜間以外は装着して頂くことにした。

施術は 1 診同様、足部のツボに接触鍼、右下肢及び体幹部の MLD を行った。また、施術中は下腿に弾性包帯を巻き圧迫も同時に行った。以後、週 1 回程度の来院。

4 診；弾性ソックスにて圧迫療法を日常的に継続してから浮腫の軽減が図られているが、歩

行時や夜間の疼痛は変化が見られず、雨天時に痛みが憎悪したとのこと。

施術は弾性包帯による圧迫、MLD を中心に行った。

6 診；施術後は浮腫が軽減し疼痛も緩和されるが、歩いていると直ぐに痛みが戻り、休んでも痛みが引きにくいとのこと。疼痛と間欠跛行の様子から、疼痛の原因が浮腫以外にもあることを疑い、整形外科の受診を促した。

7 診；前回来院後に整形外科を受診、脊柱管狭窄症の診断があったが、下肢の疼痛は腰が原因ではなくリンパ浮腫による痛みではないかとの説明があったとのこと。

施術は下腿の弾性包帯による圧迫と大腿部・体幹部の MLD に加え、腰臀部に刺鍼と施灸し、局所の筋緊張の緩和を図った。施術後はかなり楽になった様子。

10 診；歩行時の疼痛はあるが、夜間痛はかなり軽減している。

施術は弾性包帯、MLD、腰臀部の刺鍼・施灸を行った。

12 診；歩行時の下肢の痛みは軽減されていて、調子の良い時間が少しずつ延びてきている。ただ、朝起床時が最も痛みを伴う。

施術は前回同様に弾性包帯、MLD、刺鍼・施灸を行った。

14 診；年末年始を挟んだことから前回から 5 週後に来院。

この間、かなり歩行も楽になっており、就寝時に側臥位で少し下腿が痛むことがある程度とのこと。浮腫の状態は、大腿部の浮腫の増加が見られたが、下腿部の浮腫は維持されていた。施術は、弾性包帯をややきつめに巻き、MLD と腰臀部の刺鍼・施灸を行った。

15 診；1 週間後に来院。下肢の痛みは殆ど無く過ごせており、時々、足関節周囲に違和感を感じる程度。

17 診；下肢の痛みは殆ど無く過ごせている。浮腫の状態も左右差が殆ど無い状態で維持できている。以後は腰や下肢に痛み・違和感が再燃したときにご来院頂くこととした。

●まとめ

初回来院時、症状のお話を伺い、病院からの紹介状、既往歴とその治療内容からリンパ浮腫による下肢疼痛として治療を開始しました。両下肢にリンパ浮腫がありましたが、右下肢のみの痛みであったため、まずは右の浮腫軽減に主眼を置き、MLD 及び圧迫療法を行いました。浮腫の状態は加療開始後に急速に改善が見られましたが、疼痛の状態はほぼ変化がなく、むしろ悪化しているような状態のこともありました。そのため、リンパ浮腫による疼痛の他にも

下肢の痛みの原因があるのではないかと考え、整形外科を受診して頂きました。その結果、腰部脊柱管狭窄症との診断がありましたが、狭窄症による下肢の痛みではないとの説明を受けられたようでした。しかし、脊柱管狭窄症も考慮して腰臀部の筋緊張を収めるため、局所への刺鍼と施灸を加えることにしました。リンパ浮腫治療に鍼灸を併用したところ、数回施術後には下肢の痛みがほぼ消失し、歩行や日常生活がかなり楽になったということでした。今回の例は、下肢の痛みの原因が、当初の診断ではなくその裏に別の原因が隠されていたケースとなりました。この症例のように、一つの症状に対して、常に様々な要因を考え合わせて施術に望まなければならないと改めて考えさせられた貴重な例となりました。